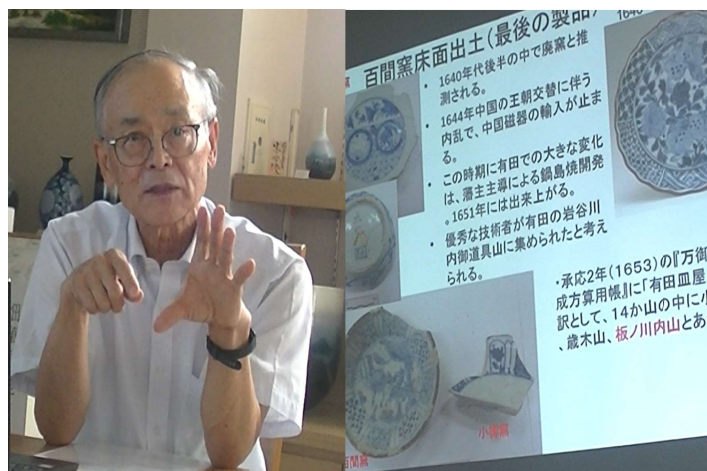


「百間窯を知る」再講座！

本年度5月、武雄図書館にて大橋先生による公開講座「百間窯を知る」が開催されたが史談会からの参加者が少なく、同講座を9月6日にキッチンングランマにて再度開催して頂いた。山内町の百間窯はこれまで数回訪れているが、今回は創業時期や有田との関りなどより詳細な内容を知れる講座となった。

1637年の窯場の整理統合は有田で有名な事件として知られているが、この時期に百間窯が始まった可能性が高いことが明かされ、百間窯で出土した陶器や磁器がその後有田で誕生する磁器や青磁に影響を与えていることは大変に興味深く、出土した陶片からその後の有田の焼き物生産に大きく関わっていくことが分



9月6日「百間窯を知る」再講座 キッチンングランマにて

かった。百間窯は1640年代後半に廃窯になったと推測されていて、あらためて良い学習機会になった。



有田史談会

事務局

佐賀県西松浦郡有田町上幸平 1-8-5

TEL 090-4740-4752

HP arita-sidankai.sub.jp/

arita-sidankai@hotmail.com

2024年度 活動報告

- 4月 講座開催「スイス・アリアナ美術館所蔵の『カ』銘の有田色絵磁器」
史談会通信No. 48号発行
- 5月 講座開催「有田皿山人物伝講義」
史談会通信No. 49号発行
- 6月 史談会通信No. 50号発行
- 7月 会報No. 12号発行
史談会通信No. 51号発行
- 8月 史談会通信No. 52号発行
- 9月 史談会通信No. 53号発行
講座開催「百間窯を知る」
- 10月 史談会通信No. 54号発行
- 11月 有田八十八カ所札所巡り
史談会通信No. 55号発行
- 12月 講座開催「有田皿山人物伝講義」
史談会通信No. 56号発行
- 1月 会報No. 13号発行予定
史談会通信No. 57号発行予定
- 2月 史談会通信No. 58号発行予定
- 3月 史談会通信No. 59号発行予定

本年度は5月と12月に尾崎葉子顧問より「有田皿山人物伝講義」を聞く機会を頂いた。5月は「金ヶ江三兵衛とその周辺の人々」、12月は明治期に有田焼をはじめ優れた日本の工芸品を世界に輸出した「起立工商会社」の講義で、佐賀市出身の松尾儀助の話は季刊皿山「」にも掲載されているので是非読んで欲しい。いずれも生涯学習センター会議室にて楽しく拝聴した。



12月23日「有田皿山人物伝講義」生涯学習センター会議室にて

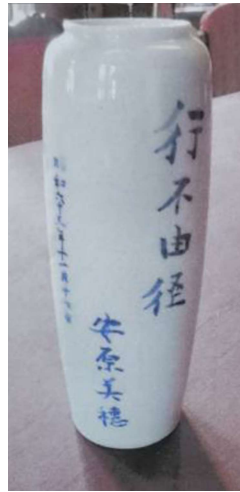
「有田皿山人物伝講義」

論語のすすめ

坂井 勝也

行不由径 行くに徑に由らず

出典は論語ですが、意味は「往來を行くにも近道や抜け道などは通らず、常に大道を歩くこと」つまり、邪道を避け、常に公明正大で大道を歩むこと。



写真は昭和57年11月16日、安原美穂^{よしほ}検事総長が深川製磁を来訪された時、揮毫して頂いたものです。深川明社長より揮毫をお願いしたところ、さらさらと素焼きの花瓶に「行不由径」とご染筆して頂いたものです。当時、私は総務兼秘書でしたので、おそばに居りましたが、何と読むのか意味も分かりませんでした。

ある日、論語を読んでいたら偶然「行不由径」の文章に出会いました。

論語 雍也^{ようや}第六の十一に、「子游^{しゅう}、武城の宰^{さい}と成る。子曰く、

汝人を得たるか。曰く、擔台滅明^{たんたいめいめつ}と言う者あり。行くに徑に由らず、公事に非ざれば、未だかつて偃^{えん}の室^{しつ}に至らざるなり。」

孔門十哲の一人、子游が、武城という村の長官になった時、孔子が心配して「お前は部下にしつかりした人物を得たか」と尋ねると、子游は、擔台滅明の名をあげて、この者は、公明正大で、往來を行くにも近道や抜け道などは通らず、また公用でなければ決して私の部屋には参りません」とこたえ、孔子を安心させました。

安原美穂著「検察の窓から」によりますと、「検察は常に気負うことなく、いわば自然体をもって、寛厳よろしきを得た良識のある検察権の行使を通じて、真に正しく国民の期待に応えて行くべきである」とされ、「行くに徑に由らず、検察伝統の大道を歩みたい」との基本姿勢をもって重責を果たされたとのことでした。

明治、大正時代に育った人は、「論語」を味読し、自分の生活の指針としておられたようです。私自身、天国が近くなり、遅ればせながら「論語読みの、論語知らず」と言われないように論語を学んでいきたいと思っています。皆さんにも人生の指針とするべく、「論語」をお薦め致します。

家族写真の思い出

井手 邦男

娘が還暦を目前とする今年の10月に、ゾロ目の年齢になる誕生日を迎えた。さすがにこの年齢になると、娘の誕生日を祝うイベントは何もしないが、娘から何かを要求される事もなかった。既に友人や職場の同僚など交流がある人達からは祝ってもらっていたようだ。

そんな頃、テレビを見ていて何の番組でどんな内容だったかは記憶していないが、映し出されたテレビの画面に家族写真が紹介されたのを見て、「うちは家族写真は撮っていないなあ」と口にしていった。それを聞いた娘が「そうね、写真撮ろうか。シロも家族だから一緒に」と言った。シロは我が家の飼猫である。その時は、その場だけの話だろうと気にも留めず聞き流していた。

娘の誕生日から3日後、娘は仕事の休憩時間に突然に電話をかけてきて「明日休みになったから、シロも連れて写真館に行くよ! 10時に予約入れたから」と予定を告げてきた。有り余る年休を、仕事を調整し1日取得できたらしく、平日に休みがもらえたようだ。娘は伊万里にあるN

写真館に家族写真の予約をしていた。写真館で撮るのは証明写真くらいで、家族写真を撮影するのは初めてだったので、どんな格好で何を着て行けば良いのか悩んだ。ましてや猫を連れたの撮影となると、猫の毛が付いたり服に引っかけ傷が付いてしまいかもしれないと考えてしまった。娘にどんな格好で行くつもりでいるのか尋ねると、明るい色の服装をリクエストしてきた。

写真館へ向かう当日、シロは強度の人見知りなため外出用のキャリーバッグに入れるのにひと苦労である。猫の毛があちこちに付着するのを最小限にするようしっかりと毛繕いした後、体にハーネスを着けた。いつもと雰囲気が違うことを察知したのか、普段と違う鳴き声を出し抵抗を続けるが、嫌がるシロを何とかキャリーバッグの中に誘導した。

写真館に到着し、まず目に飛び込んできたのはウェルカムボード。

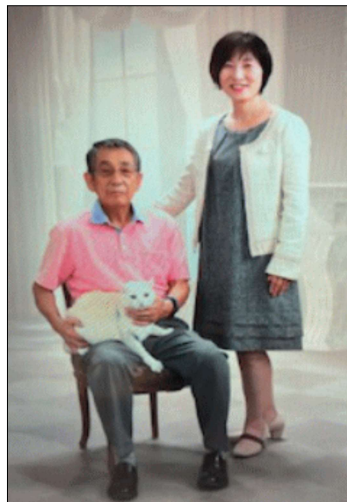


私たちを迎える歓迎の案内がされていた。撮影の場所に案内されると、そこにはいろいろな小道具類が準備されていて、目を見張るような空間だった。

動物との撮影は、赤ちゃんや幼い子供同様に指示が効かない相手なため、顔を背向けたりして思うように撮影出来ず、私と娘は呼びかけたりいろいろ気を引く音を鳴らしたりと困難を極めた。

そんな中、シロを絶妙なまでに配置やポージングの指示を出して写真撮りを最高に仕上げるプロの写真家のテクニクに感動を覚えた。自分たちが撮る写真は、姿勢や立ち姿、顔の向きや位置など細やかな表現は余程意識していないと難しいものだが、プロの撮る写真は表情の柔らかかさなど日頃の自分を引き出した写真を見るとプロは違うと思った。

今年は、自分の年齢が喜寿なので



ゾロ目の記念を形に残したいとの発案は、娘が以前から考えていたらしく、更に私が発した「家族写真は撮っていないなあ」が合致したようで、素早くアクションを起こしたと話してくれた。この出来事が、娘への誕生日プレゼントになったかは分からないが、娘の行動に賛同し家族写真を撮影するという思いがけない記念の1日になった。

有田人物伝 「福島鐵雄」

中村 貞光

毎回、会報発行の時期になると頭を悩ませているのは私ばかりではないようで少々安心をしながら、提出目前になり慌ててしまうこの頃です。今回の題は有田人物伝「福島鐵雄」を書こうと決めたものの、大丈夫？との声が私自身の中から聞こえ、躊躇しましたが思い切ってチャレンジすることにします。

時代は大正末期から昭和初期に札幌鉄道病院の物理科長の職にあった有田出身の福島鐵雄博士を取り上げてみました。有田では殆ど知られていないのが不思議なほどです。私は帰省直後に泉山の歴史民俗資料館を



訪ね当時の資料館長久富桃太郎氏に初めてお会いし福島鐵雄氏について尋ねましたが、久富館長はご存知なく、私の読んだ「ビワの葉療法の手帳」には確か著者が有田の墓の前で撮った写真が掲載されていたので、著者に直接聞くしかないと出版社へ電話して事情を伝えると、後日連絡が。外尾神社の道路を挟んだ向かいの山側にお墓が確かにありました。（帰省直後に墓地での写真勿論私です）

さて、有田町本町にある馬渡クリニクの駐車場の片隅に顕彰の石碑をご存知の方はおられると思います。日本で初めてロータリークラブを創設したのが福島喜三次氏（ふくしまきそじ）で、その顕彰碑です。「概説日本ロータリー史」のホームページには次のような記述があります。

『日本人第一号のロータリアン福島喜三次氏。大正4年から5年頃

（1915-16年）三井物産の子会社で東洋綿花（後のトーメン）のアメリカ・ダラスの社長に福島喜三次（東京高商卒・今の一橋大の前身）という人が居られた。福島氏の下に、ドイツ人でウイリアムという人が居て、ダラス・ロータリークラブの会員になっていたが、或る日福島氏を例会に連れてゆき、入会をすすめたという。福島氏は佐賀県有田市の出身で、有田では後年、福島喜三次伝を刊行したが、福島氏がダラスで何時入会したかの記録は残っておらず不明であるとしている。だが、当時、ロータリー初期の段階では一業種一名の資格が極めて厳重な頃であり、従ってアディショナル・メンバーとして入会した筈であるから、アディショナルという制度が出来た1925年以降つまり大正四年以降のことだけは間違いないであろうということになってい



福島鐵雄氏の墓地にて

る。福島氏はこういうことで日本人としてロータリアン第一号であるとされている。』

その福島喜三次氏の分家（昭和に時代まで葉舗）が有田駅寄りの本町丙一〇九四にあり、そこが福島葉舗で、そこで生まれたのが福島鐵雄氏なのです。帰省直後に福島鐵雄氏の姪御さんにお会いする機会がありました。生前の福島鐵雄博士のお手伝いをされていた折のことが聞けました。その時に墓地を案内してもらいました。

福島鐵雄氏は札幌鉄道病院在職中に、西洋医学が理論偏重であることに失望され、漢方の大家である中山忠直氏の「漢方医学復興論」とその巻末にある井篋節三氏の「どんな病もビワの葉で」を読んで共鳴され、その運動に参加するとともに、その中山氏の論文中にあったビワの葉療法の治療的価値について強い関心を持たれました。

赴任地の札幌から静岡県引佐郡細江町（現在は浜松市北区細江町）の定光山金地院という禅寺の河野大圭禅師を訪ねて師事し、ビワの葉の効用について科学的究明に努力され、昭和二年十月五日発行の月刊誌「日

本及日本人」に「皮膚を通して行ふ青酸療法」と題した論文を発表されました。

明治時代は文明開化を受けて全ての分野で近代化が叫ばれた時代背景から医療の分野も例外でなく、それまで東洋医学に頼っていた医学は西洋医学一辺倒に移行し、漢方医学は排他されていきました。明治政府は西洋医学の教育制度を中心に据え、一八七四年に医制を制定。医師開業試験の科目はすべて西洋医学となり、医師になるには西洋医学を学ぶことが必須になったのです。これに異議を唱える漢方医たちが漢医継続願という反対案を帝国議会に提出しますが否決され、漢方医学は隅に迫りやられ、自然消滅の危機に瀕していま



『皮膚を通して行ふ青酸療法』表紙と論文

した。このような時代に福島鐵雄氏は一人で奮い立ちますが、多くの医師仲間たちはどのように感じたでしょうか。頭がおかしくなってしまうた奇人変人のたぐいとして冷笑されたに違いありません。しかし東京帝国大学医学部を卒業され立派な医師として期待された方です。

尾崎葉子顧問が資料館館長をされていたおり福島鐵雄氏の記録がないか尋ねていたら、後日「松浦時報」という大正十二年七月十五日付けの新聞記事が見つかったと資料を頂きました。

新聞には、◎**福島医学士の錦衣帰郷**の見出しで「外尾福島老葉舗来助君の嗣子鐵雄氏は中学時代より俊才にして高等学校在学中は特待生の優遇を享け東京帝国大学医学部を首席にて去三月卒業し以来引続き同大学にて研究中なりしが今回医学士の称号を得て錦衣帰郷せられたる由福島家の名譽は申すまでもなく有田地方の名譽といふべき」との記事が掲載されています。

さて、その福島鐵雄氏の発表した論文の掲載された月刊誌を東京神田神保町の本屋街にて探しましたが見つからず、今は国会図書館にあるの

みでコピー本を入手し、コピー本なので読みづらく難読でしたので文字起こしを行いました。



大正12年7月15日付け 松浦時報の記事

以下はその一部です。
『今日の西洋医学が其の治療的方面に於て頗る無力にして、到底救世の具に非ず、今や全く行詰まりの状態にあるのは、心ある者の等しく知れる所なり。即ち西洋医学は唯徒らに診断のみにとらわれ、治療的方面を殆ど顧みず、最高学府の教える医学は煩雑極まる空理空論のみにして、真の医学とは頗る縁遠きものと云わざるべからず。これ西洋医学が本質的に治療的方面に不適当なるを示す証左に非ずして何ぞや。』

不肖余の如きは幸に最高学府に学ぶの光栄を得、卒業後更に大学に於いて、医学の実際に就き、指導を乞ふの幸運を有したりき。然れども西洋医学の無力たる到底予をして満足せしむべくもあらず。学べば学ぶ程失望し、学的良心の前に一種の自暴自棄に陥り斯くの如き無力なる医学を奉ぜんよりは寧ろ医を廃するに如かずと思ひし事一再ならず。如何にして医学本来の使命に忠実なるべきかと悶々の情に堪へざるものありき。

この暗黒的絶望期に於いて、余を救いしは大正十五年十月の「日本及日本人」臨時増刊「三大巨編号」に載せられし、中山忠直氏の「漢方医学復興論」なりき。同論は従来野蛮視せられたる漢方医学の本体が、西洋医学とは比較すべくも非ざる優等なるものにして、驚くべき治療的効果を記載せり。―余は同論を読み、初めて漢方の偉大を知り、余の蒙は啓ひられ、学校以外に真正の医道の世に存する事を知り、直ちに漢方医学継続の使徒たらんことを決心するに至れり。』

福島鐵雄氏の研究は後に大阪大学を始め多くの大学に受け継がれ今日に至って、「民間療法」としてビワの伝道師は数多く全国に広がっています。特に二〇〇二年二月に

全国紙「日刊工業新聞」に掲載された『ビワの葉から抗がん物質』の記事はセンサーシヨナルで、同年十二月の高知新聞には高知医大付属病院薬剤部から『ビワの種で肝機能改善エキスが細胞硬化抑制』が立て続けに発表されるなど、福島鐵雄博士の研究は確実に受け継がれています。九州では鹿児島大学と地元の十津川農場が共同研究（特許 第4771105号）を行って「ねじめビワ茶」として販売され、ビワの効能が広く知られるようになりました。

私は帰省するまでは薬局の仕事に従事していたので薬草の効能について多少知識は持っていました。枇杷についての知識は殆どなく、大分にてビワ療法を学んでいた折に初めて枇杷が治療に使われていることを知りました。また福島鐵雄博士が有田の出身だと知り、福島鐵雄氏とのご縁を深く感じています。



甕割図の伝播

鶴 美百合

史談会の皆様あけましておめでとうございます。今年も皆様とご一緒に講義を聴いたり、史跡を巡りたいと思っておりますので、皆様元気に頑張ってくださいませう！本年もよろしくお願いいたします。

今回も指一本！スマホ勝負です。手短かに参ります。リラックスして読んで頂けましたら幸いです。

さて、いきなり質問です。皆様、ご自分の家で使っておられる食器や床間に飾っていらっしゃる焼き物の絵柄でストーリー性のある焼き物というのがありますでしょうか？私の家には母の残した焼き物がありますが、一般的な山水、草花、松の木文等、吉祥文辺りで、ストーリー性があるのは見当たりません。

今回はお皿にストーリー性があり、ヨーロッパ各地でコピーされ愛好された皿をご紹介します。

トップバッターは、柿右衛門様式「色絵司馬温公甕割図八角皿」です。



柿右衛門様式八角皿「司馬温公甕割図」

この皿を選んだ理由は、後ほど述べますのでお楽しみに。

あれ？これはどこかで観たことがあると思われる方もいらっしゃるのでは？それもそのはず九州陶磁文化館の柴田コレクションで今でも展示されていると思われまます。

さて、この皿の登場人物は2人？いえいえ、甕の中で手を引かれている人物がいるので3人となります。あれ？着ているものとヘアースタイルを見れば、恐らく唐人の子供だとわかりますね。

で、内容は、中国北宋時代の政治家、司馬光の幼少の頃の逸話だそうです。

「友達と遊んでいる内に一人が誤つ



おんこうげきようず

温公撃甕図 南蛮文化館（大阪）

て水の入った甕の中に入りこんで溺れそうになった。周りの子供達は驚き逃げてしまった。しかし、彼はとつさに、甕を石で撃った。すると水が甕からほとばしり、友達の少年の命を救った」というのが私のバージョンです。

それが漢詩だと、
司馬温公、童時興二郡兒一戯、一児墜二大甕水中一、群兒驚走、公以レ石撃レ甕、水迸出、兒得レ不レ死」になるそうです。

漢詩の訳は、「司馬光が「貴重な甕」を慌てず頭を使い（頭脳明晰）「貴重な甕」にも拘らず石で甕を撃ったので子供は死なずにすんだ」と簡潔。主題は、意外に欲張りで「貴重な甕」を割った咄嗟の判断（頭脳明晰）で「死なずにすんだ」との2つの主題だそうです。

それにしましても、当時の私は柿右衛門様式のお皿にこのような重大なテーマ「命」の大切さがお皿を通して語られていたとは思っても寄らなかつたですね。

さて、この日本の色絵磁器「温公甕割図」は、好評のため十八世紀後期にイギリスのチェルシー窯、ボー窯、ドイツのマイセン窯でも好んで模写されています。「命」の大切さというテーマのインパクトがあるお皿のゆえに十七世紀に海外輸出されたか、それとも、柿右衛門様式の余白の美かどうかは定かではありませんが、なにしろ模倣され、遂には、ヨーロッパの宮殿に飾られたのだと思うと感慨深いですね。

そして、ジャジャン、ニュースです。司馬温公甕割図は柿右衛門様式だけが描かれたと思われていたのではありませんか？

それが、「泉山一丁目遺跡・中樽一丁目遺跡」の発掘報告書の本をパラパラとめくっていたら、あら、まあ、なんと見つけたんです！

「温公甕割図」の陶片が出土しているではないですか！割れているのですが、大きな甕の両脇に唐人



「甕割図」中樽一丁目出土の陶片 2016年発掘調査報告書

の子供2人見て取れました。で、助かった子供もぼんやりとですが、下の方にいるのがわかります。

これを描いた絵師や作った陶工は、中樽辺りに生活して作陶していたんだろうと想像しただけで、昔と今が繋がった気がして嬉しい瞬間です。

さあ、最後は、「温公撃甕図」の今度は焼き物ではない絵画です。

一見、日本人絵師が描いたように思われますが、しかしよく目をこらすと、子供にしては彫りが深く不思議な画風、それに子供全員、驚いて逃げていないし、しかもみんな手に石

を握っているし、石もゴロゴロそこらじゅうに散らばっていて漢詩の内容と随分違いますね。しかし、ほとばしる水から助けだされた子供の笑顔は同じで、主題の「命」の大切さには代わりがないようで良かったです。

さあ、この絵を描いたのは、一体何処のどなたさんなのでしょう？
答えは安土桃山時代にセミナーヨで西洋画を習得した生徒、その後、慶長十九年（1614）徳川政権はキリシタン禁教令を發布したので、棄教した絵師の作品と考えられている。

それで、今回のテーマ、なぜ、「温公甕割図」を私が選んだ理由ですね。私の自由気ままな突拍子もない発想、柿右衛門様式の「温公甕割図」の絵師もセミナーヨで学んだ絵師によって描かれたのではないかとこっそり思っているのです。

あれ、皆さんのあはは・・・という笑い声が。😂😂😂

それでは、2025年が皆様にとって良い一年でありますように、お祈りいたします。

外尾山地区の石造物調査の結果について

大串 和夫

令和三年一月の会報で地区の古窯跡周辺の石造物について一部紹介したが、全域の調査が完了したので報告したいと思います。尚、頭部に○のあるものは、前会報で一部報告済です。□は不明字。

【八幡神社周辺】

・八幡宮 神社裏にある神社本体

・石造物 不詳

・山 神 不詳

○大神宮 当山中

安永四年八月吉祥日

○庚申社 年月日不詳

原弥吉・梶原頼六・大串弥平次

○稻荷大明神 藤本□藏 文化□年

○稻荷大明神 不詳

○稻荷大明神 大串□兵衛

天明三年十一月吉日

○天満社 施主 梶原□之助

嘉永二年五月

・自然石南無妙法蓮華經（ひげ文字）

不詳

・石灯籠 奉寄進 大串□兵衛

宝暦四年九月十日

・地藏菩薩 四国中五六番伊予

泰山寺 昭和五年五月吉日

外尾山大師講社中
・不動明王 昭和四年四月吉日
建立者 青木甚一郎他三十三名
世話人 池田エキ他二十七名
発起人 百田近助



不動明王 高さ180cm



不動明王 高さ27cm

【金比羅山】

○妙法 北辰妙見大菩薩

文化七年八月吉日 奉献一字一石

大串郡右衛門

○大勢至 文化五年五月吉日

施主不詳

○開運南斗星 安政六年 村中安全

○金比羅 文化十四年五月吉日

佐々木理助

【外尾山中央部】

水神 安永七年七月 施主不明
【JR地蔵踏切】

地蔵菩薩 外尾山大師講中

昭和十年四月吉日

【神社鳥居】

八幡宮 寛政四年二月

山中昌之作 大串郡右衛門

大串覚左衛門

【六地藏】

三郎山墓入口にある六地藏

五基あり

妙法春光□□ 年月日不詳

大日□□ 年月日不詳

地蔵大菩薩 年月日不詳

地蔵□□ 年月日不詳

□□氏 年月日不詳

廟祖谷墓地入口にある六地藏

地蔵菩薩一基 明治三十七年八月

五日 橋口節之助他十二名

【八幡神社右側面 顕彰碑】

○松村君之碑 高さ四・五メートル

以上が外尾山区内にある石造物の

全容である。

※高さ・巾等を示す詳細図作成済

因みに、地蔵菩薩（子授け・子育て）、不動明王（煩惱消滅・商売繁盛・病魔退散・出世願望）、勢至菩薩（家内安全・除災・滅罪・招福・不老長寿・延命）、大日如来（あらゆる願いの成就・現世平安）以上の願いが叶う。

外尾山八幡宮、大師堂、忠霊塔については次回詳細を報告したい。

たびら昆虫自然園

鶴 一樹

小生には神奈川県茅ヶ崎市に七歳の小学二年生の孫がいる。彼が究極の“昆虫オタク”で、四歳位から手近な虫に興味を持ち、チョウやトンボやがて「日本の昆虫図鑑」「世界の昆虫図鑑」を手元に、暇さえあれば開いて調べていた。

3カ月前の10月12日から16日まで、佐賀のジジバアバのところにやって来た。目的は「たびら昆虫自然園」だ。そこで職員の方に説明してもらって館内を回った。あと2日ばかり近くの野っ原に行つてチョウバツタを捕った。孫は帰つて行つたが、学校では虫好き3人組でワイワイやっているようだ。

虫好き少年の毒気に当てられて、自分も小学生の頃を思い出した。虫取り網を作つてセミ、トンボ、チョウを捕つて菓子箱の底にセミをピンで止めて夏休みの宿題として必ず定番だった。昔の子供（自分なら3年前）遊びは魚捕り。ハヤ、フナ、ナ

マズ、ウナギ（食べるため） 山で遊ぶ。柿、栗、グミ、アケビ（これも食べるため） 虫捕り。セミ、カブトムシ、クワガタ、トンボこれは食べないが夢中になって捕る。

子供の虫好きは遠い昔の記憶・・はるか太古の時代、大人たちが石器弓矢を使ってウサギやシカ、イノシシ、鳥など獲って火の回りで焼いて食べるという場面、子供幼児にはこのうまい肉回って来なかった。もらってもごく少量。骨に付いた残り肉ぐらいで、御馳走にありつけなかった。そこで子供は自分の食は自分の力で獲るという決意をした。成長するために日々目の前身近な手に入るものは何でも食べてみる。口に入れる。これで腹を満たす。自分の力で獲れるもの、まずはウジ虫、ダンゴ虫、ミミズ、イモムシ、そして少し動くカマキリ、チョウ、カエル、ヘビ、カタツムリ、カブトムシ、クワガタ、トンボ何でも食べた。腹を壊すこと苦しみむこともあったろうが食べる。

この習性やしみついて脳の片隅に潜在意識として残って、これが幼児の頃から小学生のころまで出るのだと言われている。中学生ぐらいになると昆虫少年はぐっと減ってしまうのだ。ベトナムとか東南アジアでゴ

キブリとか蜂の子とか路上で売っているのをテレビで見たが食用可なのだろう。

孫の昆虫好きはいつ頃までかジジは静かに見守っている。



肥前のやきものの魅力 5

山口 信行

鍋島、その魅力

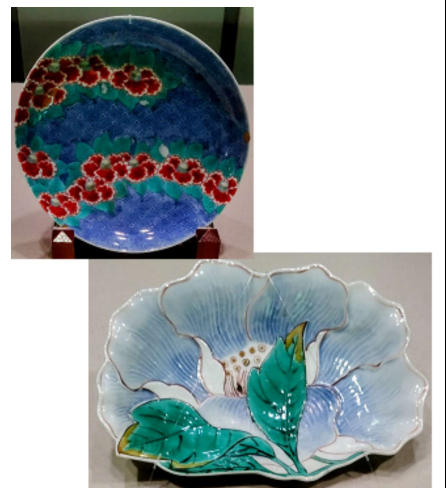
肥前のやきものについて、その魅力が自分にとつてどこから来るのか、全くの独断と偏見の素人目線で探つて来たが、やはり磁器の最高峰と云えば「鍋島」となるであろうか。

將軍等への献上、有力大名への贈答として製造されたため、藩の威信をかけて製造され、磁器の中でも最上品と目されている。デザインも斬新で美しく、まさに最高峰にふさわし



いといえるようだ。まだ、藩窯が岩谷川内にあったとき製造されたと思われる作品が、先だつて九陶の『赤戲幸コレクション』で展示されていたが、その頃から美しい。その後、鍋島藩窯の作品になると、もっと繊細に、より洗練された美しさをもつように思われる。

特に「色鍋島」と呼ばれる色絵の磁器はどれも美しく、献上や贈答として藩が採算を度外視して制作されたといわれるだけにまさにデザイン、バランス等、非の打ち所がない。藩の威信をかけただけあるようだ。江戸元禄期前後で、云々ゆるる、盛期鍋島“と呼ばれている。卑近な話で恐縮だが、その貴重さから、その頃の色鍋島は現在でもそうだが、かなりの高値で取引されていたと聞く。特にバブルの頃、寸300万円の値



が付いていたと聞く。五寸皿（径約15cm）では、1500万円というわけだ。もつとも、重文（重要文化財）クラスともなると、最低でも10億円とのことで、これはまた別格であろう。今はそこまではないかも知れないが、日本磁器の最高峰であることに変わりはない。8代將軍徳川吉宗による「享保の改革」は、江戸幕府の財政難から質素儉約を命じたことで、色絵もその対象となったと云われる。このため、それ以降、「色



染付後期鍋島

鍋島」は禁じられ、主に染付と青磁のみとなる。江戸後期は主にそのため染付が主となるが、盛期の厳格な描写は影をひそめ、かなりラフな絵付けがなされている。一般に時代が下がるほどそのラフさは拡大しているように思われる。

ところで、染付鍋島でベストを選ぶとしたらどれを選ぶのであるだろうか。私は真つ先に九陶の「染付鷺文三足付皿（尺皿）」を思い起こす。盛期鍋島で国の重要文化財となっている周知の作品であり、ムラのない濃みの見事さ、美しさは格別で第一にそれを選びたい。



染付の盛期鍋島

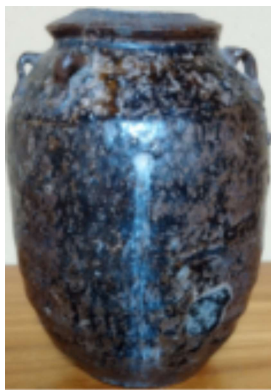
では一方、色鍋島では何を選ぶか。私はMOA美術館の「色絵桃文皿（尺皿）」を真つ先に選ぶだろう。九陶で10年程前だったか、『將軍家献上の鍋島・平戸・唐津展』が催されたときに展示されていたように思う。



色絵の盛期鍋島

それを観たとき、その描かれた桃の表面の繊細さ、質感がまるでまさに桃の実そのものと感じたものだった。同様に、こちらも国の重要文化財に選定されている。個人的には、これらの二点、将来ぜひ「国宝」として認定して頂きたいものだ。

古唐津、その魅力



有田で磁器が誕生する以前、唐津の岸岳城下で松浦党波多氏の庇護のもと、1600年代に、「云わゆる」唐津

焼」が焼かれ始めたこと云われている。陶器である。波多氏は朝鮮出兵のおり秀吉に改易さ



せられたため、その陶工たちがその後周辺の地域に拡がって行き、それぞれの地域で陶器が焼かれることとなる。周知のとおり、その後唐津焼は茶陶として「一楽二萩三唐津」と呼称され重用されることとなる。残されている古い唐津焼は、地域ごとに系列呼称があり、「松浦系」「武雄系」「平戸系」等のように呼ばれたりしている。勉強不足でその違いはよく分からないが、ただ唐津焼の魅力はよく分かる気がする。まあ、何といっても土であり、素朴な温かみを感じられる。手で包み込んで使つて、その変化を味わう。少し前に佐賀新聞紙上で連載されていた「サカズキの國」は、古唐津の酒器を中心とした、ぐい呑みにまつわるものだったが、愛玩の器の悲喜こもももなかなか楽しかった。

面白いのは、同じ唐津焼でも、状態にもよるが、桃山期から江戸初期頃まで製造されているのを古唐津と

して、特にそれ以降のものより珍重される傾向があること、そして、「本歌」という名の下に、その周辺の各地域で焼成された古唐津より、岸岳城下界限で作られた古唐津古窯の焼成のものがまた、より珍重されたりする傾向があることである。唐津のステイタスは幅広く、思った以上に高いのである。何かのタイトルではないが、古唐津は、「野育ちなれど格高し」なのである。

ところで、古唐津から一つ名品を挙げるとしたら、何を挙げるか。私はやはり次の大皿である。梅沢記念館蔵の「絵唐津松文大皿」。これも重要文化財であり、唐津焼の代表としてぜひ国宝にしてみたいものである。

肥前のやきものの魅力といっても、有田焼と唐津焼だけになってしまつ



絵唐津松文大皿



安政六年 松浦郡有田郷図

普賢さん

前田 順三

本町の氏神様は外尾神社、通称「普賢（ふげん）さん」である。こ

たが、これら以外にも肥前のやきものは他にもある。けれども、総じて感じるのは、肥前のやきものには、草創期の大胆さと繊細な美しさ、そしてどこか整然とした美しさがあるように思えてならない。残念ながらその理由はよく分からないが、それらの美しさが、肥前のやきものに人々が惹きつけられる理由なのではないかと私は思う。（終）

神体は普賢菩薩の石像である。

安政六年（一八五九）の「松浦郡有田郷図」には、旧外尾宿、現在の本町に「普賢菩薩」と書き込まれている。そのことから江戸時代からその場所に普賢菩薩が祀られていたと思われるが、祭祀の形式としては普賢堂であったのか神社であったのかは定かではない。

普賢菩薩の石像はいつ製作されたものかは不明であるが、外尾神社の境内では、社殿右奥にある「天照大神宮」の基礎部分に安永五年（一七七六）と刻んであり、境内では一番古い石造物である。他に石造物としては水盥（すいぐわん）に嘉永六年（一八五三）とあり、ペリー来航の年である。あの歴史的出来事が有田まで伝わっていたのか、もし伝わっていたらどのような様子であったのか気になるころではある。

今回「普賢さん」を何故テーマとして取り上げたかといえば、御神体が仏像だからである。神仏習合の名残と言われればそうかも知れぬが、管見（かんけん）にして普賢さんのような例は他に知らない。他にも町内で神社を仏教の菩薩、如来の名で呼ぶところはある。



外尾神社の普賢菩薩

例えば丸尾の「観音さん」、黒牟田の「やくっさん（薬師さん）」などである。しかしながら、丸尾の「観音さん」は本町の「普賢さん」と同じような形式で御神体は向かって左奥に「天照皇大神宮」がお祀りされているものの、手前が観音堂であるために、通称「観音さん」と呼ばれている。

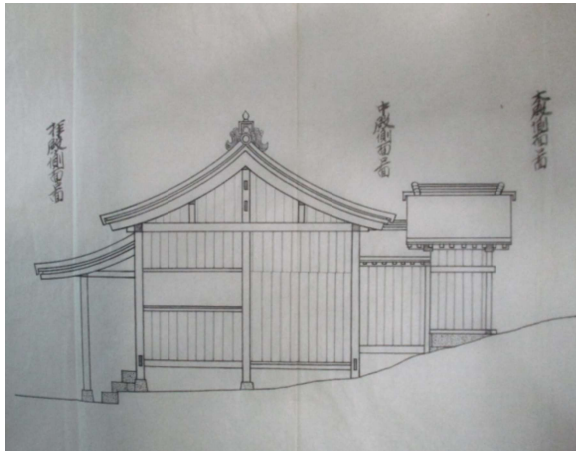
また黒牟田の陶山社（日峯社）も地元の方からは「やくっさん（薬師さん）」と呼ばれているが、これも丸尾の観音さんと同様に、社殿の下の手前左側に薬師堂があるためにそのように呼ばれている。その二社はそれぞれ神道の御神体（祭神）と仏教のお堂は別個にお祀りしている。

また、別の例として、ゼンリン地

図に武雄市の上西山に薬師如来を祀った「薬師神社」と記されているところがあるが、そこは鳥居もなく、どのように見ても「薬師堂」である。実際、「武雄新四国 番外」の木札が張ってある。

そのほかに、安政六年の絵図には、外尾村の椎谷神社が「権現」と表記しており、戸矢（地図の表記は「戸屋」）には「菅野大権現」が書かれている。「権」には「仮に」の意があり、本地垂迹説では、「権現」とは仏が仮に神の姿に化身して現れることをいう。椎谷神社は元来イザナギノミコト、イザナミノミコト、アメノホヒノミコトの三神を神鏡として祀っていたが、その神鏡が盗難にあり、その代わりにその三神の本地仏として、阿弥陀如来、釈迦如来、観音菩薩を奉斎していた時期がある。神鏡は後に見つかり奉還されたが、恐らくその経緯から「権現」との表記であろうと考える。

また「菅野権現」については、奥殿に阿弥陀如来と観音菩薩と思しき仏像が数体おいてあるが正式な安置の仕方とは思えない。明治年間の「社寺二関スル書類」には、菅野権現の祭神は「徳川家康」となっているが、これは「権現様」と言えばま



無格社外尾神社建物の側面図

ず「徳川家康」が人々の認識としては最初に思い浮かぶからであろうと思われる。江戸期がいくら徳川氏の治政下とは言え、有田内の地区に「徳川家康」を祭神とした神社があるとは思えないが、現在のところ本来の祭神は不明である。おそらく農耕に関する神であろうと考える。

それらと比較して「普賢さん」外尾神社」を考えてみた。

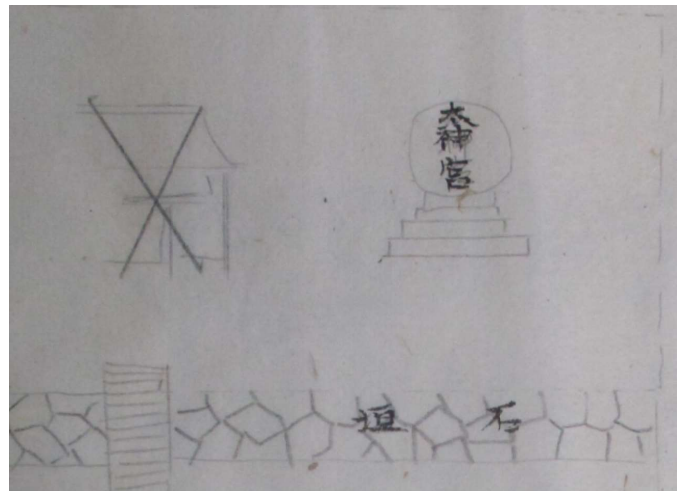
まず「明治二十七年 社寺二関スル書類 有田村役場」、「明治三十九年 社寺二関スル書類 神社佛堂ノ由緒及舊跡二関スル書類 有田村役場」の「公認願」には、神社名は「無格社 太神宮」、祭神は「天照大御神」と届け出てある。これは明

治初年の神仏分離により、神社に仏像を祀ることは罷りならず、社殿右奥の「天照大神宮」を祭神とせざるを得なかったであろう。

しかしながら、明治三十九年の書類の中に「無格社外尾神社建物」として側面図及び平面図があり、昭和五十三年にコンクリート製に建て替えられてはいるが外観はほとんど同じである。

また「不動産登録申請書」というものがあり、本殿、中殿、拝殿の構造、建坪等の記載があるが、その本殿の中には石像の普賢菩薩が鎮座していて、「天照大御神」は祀られていないのである。「天照大御神」は社殿に向かって右外側奥である。

そしてまた添付書類の中に簡易な境内図があるが、そこには、わざわざ社殿らしき建物を描きながら、その上に×印をつけ、その右側に「太神宮」が描かれている。これは何を意味するのであろうか。社殿の建設時期は不明であるが、本来は普賢堂を作るべきところを神殿造りにし、そこに従来地元民から慕われ尊ばれていた普賢菩薩を祀ったのであろうか。これは、仏像を神として祭祀の対象としてはならないという神仏判然（分離）令に明らかに反している



ので、当局の目を免れるための方策だったと思われるが、実際の姿と全く異にすることも忍び難く、苦肉の策であつたのであろう。

さて、普賢神社といえはすぐに頭に浮かべるのは雲仙の普賢岳に祀られている普賢神社だが、由緒を調べたが、普賢神社がある普賢岳は古代より妙見岳と共に山岳信仰の地であり、普賢菩薩を祀ったところから普賢岳の名がついたとはあつたが、反対にこちらが知りたいところの何故そこに普賢菩薩が祀られるようになったのかその由来については皆目わからなかった。

本町の普賢さんは、到底山岳信仰とは関係ないように思われる。では何故か。そもそも我が国の基本的な祭祀の形態の成立は、農耕生活と深く関わっていると思われる。普賢菩薩について調べても、文殊菩薩とともに釈迦三尊像の脇侍で、「知」の文殊に対して、「行（実践）」の菩薩であるとか、あらゆる場所に現れてすべてのものに教えを説き、救済する、あるいは、文字通り「普（あまね）く賢い者」等のことは分かったが具体性に乏しく、ただ「法華経」に女性を成仏させる仏として普賢菩薩が描かれているとするが、地方の神社の祭神としてお祀りするには納得するのに不十分などころがある。

旧新村の外尾宿に祀るとすれば、明治四十三年の建立ではあるが、外尾神社としての鳥居に刻んである「風雨順次禾（か）稲穀豊穰」とあるように農耕の豊穰にあると思われる。これは飽くまでも私見であるが、古来広く諏訪信仰というものがあり、その総本宮である信州の諏訪大社の祭神は建御名方神であるが、本地垂迹説では、建御名方神の本地仏は普賢菩薩である。

諏訪神社は旧松浦郡地区にも多く存在し、信仰を集めている。諏訪信仰のご神徳は、諏訪大社の武勇の神、

軍神でもあるが、風、水の守護神、五穀豊穡の神としても広く信仰を集めている。風、水を司る神、また農耕の神であれば、この地区にお祀りしていることも頷ける。それ故外尾神社（普賢さん）は普賢菩薩を御神体とはしているが、実態は諏訪神社としての信仰ではなかったか、というのが私の推論である。

ギチ土

馬場 正明

陶器大辞典の「ギチ」の項目には「対州土と称するものに石質と土状との二種あつて、この土状のものを肥前有田ではギチと称し明治初年より釉料に使用した。昨今は全く使用しない。ギチは有田地方語らしく、泉山原料中にて土状のものその間に挟在するをギチといふ。」とある。そのギチ土について調べた。

陶石の成因は、よく知られるように流紋岩などの火山岩脈が堆積岩などの中に貫入し、岩脈が冷え固まるまでの間、酸性熱水が岩脈に作用して流紋岩から鉄、マグネシウムの多

くが溶脱され、カリウム、ナトリウムなどのアルカリはいくらかが溶脱され風化される。初めに鉄、マグネシウムを溶脱してしまい、後にカリウム、ナトリウムの残った場合の陶石を「弱」といい、長石的に扱い釉薬（うわぐすり）に使われます。

更に溶脱が進みアルカリ含有量が減った陶石を「強」として、磁器の胎土（陶磁器の原材料の土）として使われます。この陶石化は熱水の冷めるまで続きますので、陶石化がほぼ岩脈全体にわたってみられます。



陶石の採石場である泉山磁石場

なお岩脈に割れ目があれば、その部分は熱水や蒸気の通路となり通路近傍に化学的風化作用のほか岩脈を細かく砕く機械的風化も同時に進行し、土状の粘土（ギチ土）が生じます。陶磁器の制作に必要な粘土を得るためには陶石の場合は採取した後、一定の大きさに粉砕して水簸しなければなりません。ギチ土の場合はそのまゝあるいは水篩をするだけで良く、陶石発見の足掛かりとなります。

また、「ギチ」という呼び名は「キチキチ」（容器に余地のない程に詰まったさま）を連想されるもので、筑後地方では粘土過多の土壌を「ギチ」と呼ぶそうです。

有田皿山の歴史に輝いていた一族・川原家

特別寄稿 尾崎 葉子

在職中から有田皿山の人物の中で気にかかる人、一族がいます。それは大樽の古酒場の主であった川原家、川原善助、善之助、善右衛門、忠次郎と続く人々であり、有田皿山の一期をリードし、その隆盛に力を注いだ一族でした。

川原家は芦原（現在の武雄市）から善助の時代に有田に来ています。有田町歴史民俗資料館には東京・刑部家から寄贈された『松浦郡有田皿山大樽山竈人別改帳 安政六年（一八五九）末三月 咄平左衛門』（以下かまじょう）という、今という戸籍簿のような資料が保存されています。それには当時の川原家が記載され、菩提寺は芦原光明寺 禅宗、鍋島千代丞の被官という士分格で、酒請川原善之助 五五歳、女房四五歳、商人の子勘蔵二四歳、娘ふみ十六歳、同子忠次郎十一歳、娘さわ七歳と商人子の周一郎二七歳、女房十七歳、母五七歳の九人家族でした。

『肥前陶磁史考』によれば、川原善右衛門と称したのは、善助の子とその孫の善右衛門善八の二人がいますが、善之助の時代に七代深川栄左衛門と共に佐賀藩国産方より柞灰の一手販売の権利を得ています。また、善右衛門善八の頃は東登（大樽窯）も所有していました。ちなみに石川太左衛門という新酒場を営んでいた人物もいました。

川原家については元治元年（一八六五）の春、唐津の材木町年寄・平松儀右衛門が城下の仲間数人と長崎への旅を思い立ち、その際、書き残

した『道中日記』にも紹介されています。伊万里から宮野を経て有田皿山に入った一行は高札場裏手にあつた永楽屋に泊まっています。その折、当時の有田の情報も入手しています。見聞きしたものをすべてに興味津々でもあつたのでしょうか。有田の三徳者として一人は久富与次兵衛(昌保)、

二人目に黙齋という藪の内流の茶人で酒屋の由としてあげ、高札(場)より手前に住んでいたことや最近宗匠は亡くなり、若亭主の時代(善右衛門善八)になつていること、家内皆茶を嗜んでいることも耳にしています。この黙齋こそが川原善之助で、『竈帳』にある川原家の当主でした。

三徳者のもう一人は高札場の向かいに住む萬屋何某という鍋釜店の主人とあります。『竈帳』には鑄掛屋鍛治の清三郎(五六歳)とあるのがその人物に当たると思われます。いずれにしても、三人は当時の有田皿山で徳のある人と目されていたようです。

『竈帳』から得られる情報で少し説明を加えますと、周一郎は後の善右衛門善八で勘蔵は二男。この人物は後横尾家を継ぎ、横尾謙という名で明治三二年(一八九九)に有田町長に就任しています。三男で当時十一歳の忠次郎は、後の明治六年(一八

七三)に開催されたパリ万国博覧会に伝修生として参加しています。万博後、ボヘミアの製陶地で石膏型による製法や上絵付けの油伸ばし法などを習得して帰国しています。

明治七年一月、ヨーロッパ各地で各種産業の伝習生として励んでいた人々を、副総裁の佐野常民がウィーンに呼び寄せ撮影された集合写真に忠次郎も写っています。

帰国後の明治八年、太政官の勸業寮に奉職し、ウィーン万博に同道した納富介次郎と共に、官立奥国式陶業伝習所に於いて全国の陶業者子弟の教育にあたりました。

その後、明治十二年、合本組織香蘭社が分離した折には、精磁会社が設立され、入社しています。同十六年、オランダアムステルダム万博が開催され、再び欧州へ渡った忠次郎はフランスリモージュで最新式製陶機購入の契約をすませて帰国しました。その機械が長崎に到着したのは同十九年六月。翌二十年七月に精磁会社に据え付けられました。この間、高額な購入費を巡って会社の中でも賛否が分かれ、長崎に入港した機械の設置に一年余りかかっています。その心労もあつてか、同二十二年一月二十六日、忠次郎は亡くなります。

享年四十一。忠次郎の人となり、『肥前陶磁史考』は「資質剛直事に当る熱誠にして倦まず、我邦窯業界に功績を残せしこと少なからざりに、年齢漸く不惑を過ぎしのみにて長逝せしは惜しむべき」と記しています。

同年十月二十九日に兄の川原善右衛門善八も後を追うように死去しています。享年五五。『肥前陶磁史考』

には「資質廉明、起居優雅にして当代有志中の典型的長者。谷口藍田に学び、また茶事俳諧を好み、殊に漢詩を善くし、名を伯詢、号を桃塢と称す」とあります。善八には子がなかった故か、忠次郎が兄善八の嗣子として川原宗家を継いでいました。忠次郎の子孫の存在もよくわからず、残念ながら、その後の川原家を辿ることが出来ません。一説によれば宮野(現在の武雄市山内町)の中村家に前述のウィーン万博の集合写真が保存されていたといわれ、そこに川原家の方が嫁いだのではないかと思われませんが不明です。

このように、芦原から移住し酒造業を営みながら皿山を舞台に活躍した川原家。今では忘れられた存在となつていますが、幕末から明治にかけて一つの光を放った一族であつた



川原家の菩提寺 芦原の光明寺

ことは紛れもない史実であるといえます。

あとがき

今回はこれまで発行してきた全ての会報をひとまとめにする作業を、昨年から早々に作業を進めてきました。最近の自分自身の体調を考えてのことで、徐々に体力の衰えを感じるこの頃で、早いうちに事務局長としての集大成を形にして残したいと考えていました。会員の皆様に喜んで頂けたとしたら幸いです。



有田史談会に寄せて

2009年11月8日(日)、有田町生涯学習センターで「150年前の有田皿山ば歩こう隊」の発会式が行われました。

当日、有田町民の小学生から70代まで、世代を超えて参集いただき、それから安政六年の古地図を手にして有田皿山を歩く活動が始まりました。それまで、博物館、資料館を支えていただく市民活動が欲しいと長年願ひ続け、やっと、念願かなってNPO法人アリタ・ガイド・クラブとの共催で花王・コミュニティミュージアム・プログラムの助成を受け実施できました。

その後、有田れきみん応援団、有田史談会と発展、継続していただいた事に心からお祝いと感謝を申し上げます。

「継続は力なり」です。また、「言うは易し行うは難し」とも申しますが、今後もさらなる活動が続いていかれることを切に願っております。

尾崎 葉子

古道や窯跡 史跡マップ完成

有田皿山を 歩こう

有田町 有田皿山の150年前の
道や窯跡などを記した史跡
マップ「有田町と歩こう有田皿山」が完
成した。NPO法人アリタ・ガイド・ク
ラブ（代表理事 尾崎葉子）と町歴史民俗資
料館（尾崎葉子館長）が、安政6（18
59）年に描かれた「松浦郡有田郷図」
をもとに、内山と外山地区をまなぐ歩
いた3年間の活動成果をまとめた。

**ガイドクラブと
町歴史民俗資料館
3年の活動集約**

阿団体は2009年、暮末の民ら延べ約1800人が参加し
古地図に記された有田の歴史と
文化の足跡を自分たちの足で確
かめよう。150年前の有田皿山10地区には、表は1
年目に泉山から岩谷川内までの図（縮尺約2500分の1）、裏
内山地区、2年目は外尾山や黒面には地区の歴史や窯跡、史跡な
牟田・応法などの外山地区を巡るを巡る。各ページとも取り外し
り、計125回の踏査調査に町が、地区巡りに応じて分割し

て使うことができる。
ガイド・クラブ事務局長の中村
貞光さんは「実際に歩いてみて毎
回発見があった。歩きを繰り返さ
ながら、有田の良き再発見に役立
てほしい」と話す。

一部500円（税込み）。250
00部印刷。町歴史民俗資料館と
ガイド・クラブで販売している。
問い合わせは電話0955543
2678。（本原通代）

3年間の活動成果をまとめた史跡マップづくり。と歩こう有田
皿山を紹介する有田町歴史民俗資料館とアリタ・ガイド・ク
ラブのメンバー

